

NPO



アーダコーダ：
こどものための哲学対話
(2015.4.25)



カフェフィロ東京：
女性のためのてつぐカフェ
(2015.10.9)

4歳から6歳のこども哲学対話実践を振り返って

川辺 洋平

2014年の秋に開催された駒場祭と、2015年3月から8月まで東京大学駒場キャンパスで開催された「こどものための哲学—Philosophy for Children—」に関わることができたので、その2つの経験を振り返ってみたいと思います。

かたちで伝える哲学対話

2014年の秋に駒場祭の中で担当させていただいた哲学対話では、「まる／しかく／さんかく」の3つの幾何学図形を用いることにチャレンジしました。対話の場には2組の親子と、赤ちゃんを抱いたカップル、その他合計10名以上が参加しました。

参加者はまず、中身の見えない袋の中にあるくじをひき、そのくじに書かれた内容を、まると、さんかくと、しかくの3種類の幾何学図形をもちいて画用紙に書きました。くじに書かれているものは、「あめ」「つち」といったような名詞だけでなく、「うつくしい」「うれしい」といった、形容詞も織り交ぜられ、こどもでも読めるようにすべて平仮名で表記されていました。

絵を描き終わると円座になり、それぞれの描いた絵を順番に見せて、何を書いたかを周りの人が考えてあててもらおうというゲームをしました。意見を言う際には、なぜそう思ったのか、を添えて発言してもらおうようお願いし、対話の前のアイスブレイキングとして機能させました。

描いた絵の答えを考えるゲームが一巡してから、ゲームを通じて感じたこと、思ったことを自由に話す時間をとりました。この時、大きく10個の意見が出たので、意見同士を集約して、グループ全体で話し合ってみたいテーマを絞りました。結果として「伝わる／伝わらないの違いはなんだろう？」ということについて話す時間となり、参加者それぞれの意見が活発に飛び交う時間を持つことができました。

この実践を通して、私が個人的に挑戦してみたかったことは、大人とこどもの垣根を越えたダイアログを実現することでした。「しかくさんかくまる」というタイトルで開催したこの対話は、幼児にも理解できる単純な図形を用いることで、語彙力の差というこどものハードルを下げ、絵に対する苦手意識がある大人のハードルをあげ、両者を近づけることを狙いとしていました。振り返ってみると、そういった垣根は絵を描く行為を通して、多少なりとも功を奏したのではな

いかと思います。

また、同時に、こうした取り組みを通じて、自分の中で凝り固まりかけていた哲学対話の手法を崩したいという欲求もありました。こどもと一緒に哲学対話をすることに興味を持って早1年、特定非営利活動法人こども哲学・おとな哲学アーダコーダの理事としても活動しはじめ、学校での哲学対話実践をいくつか見てきていたために、いかなる教室環境でも哲学対話が可能であるベーシックな手法のようなものが確立されかけていました。

物質的な準備がなくても、教室にある椅子や、そこにあるボール1つで対話をはじめられることが、哲学対話の良さでもあります。一方で、準備物があること、共有できる体験をすることが哲学対話の面白さをより広げうることも、この実践から個人的に、学んだと思っています。

こどものための哲学対話——Philosophy for Children——

2015年の3月、梶谷真司先生オーガナイズのもと、4歳から6歳のこどもをもつ親子を対象とする哲学対話イベントを実施しました。15組、30名を超える参加者と、映像作品を見て、その作品から感じたことを、親子に分かれてそれぞれのグループで対話するという実践を行いました。この時の運営手法をベースに、それから2015年8月まで、5ヶ月連続で毎月1回、4歳から6歳のこどもをもつ親子を対象とした哲学対話イベントを実施しました。

2015年の4月からは、梶谷先生を協力者として、私自身がイベントのオーガナイザーとして活動しました。対話の素材として、絵本や紙芝居を使い、朗読は毎回私が行いました。意外だったのは、おとな同士、親になってから他人とじっくり意見を交わすような時間がなく「親が楽しんでいます」という意見が多かったことです。毎回イベント終了時に参加者に記入していただいたアンケートは匿名性でしたが、毎月レポートしているという親子も散見されました。

2015年4月と、2015年5月のイベントでは、親子の部屋を離してみるというチャレンジと、対話の途中にエクササイズを入れたり入れなかったりするという試行錯誤を行いました。

また、2015年6月と、2015年7月のイベントでは、絵本や紙芝居などの対話素材を用意せず、3つのキーワードを提示して、グループごとに、好きなキーワードを選んで対話をするというチャレンジをしました。

こうしたトライアルを経て、2015年8月のイベントでは、携帯電話のカメラ機能を用いて、くじびきでひいたキーワードを表現する写真を親子で撮ってくるという実践を行いました。制限時間の中で決められたテーマを写真で表現するという行為は、前年度の駒場祭で私自身が実施した「しかくさんかくまる」の延長

線上にある取り組みでもあり、それまでの5ヶ月間で培った4歳から6歳のこどもたちとの哲学対話を進行するエッセンスが詰められたものにもなりました。

親子で撮ってきてもらった写真は、それぞれの撮影者となった子どもたちが、プロジェクターで写真を投影しながらキーワードを発表し、参加者から温かい拍手が沸き起こりました。また、それまでの5回のイベントでは直接親子で対話することができなかったので、2015年8月のイベントに参加した親子から、「親子で話す時間が持ててよかった」という意見を多数頂きました。

だれが「こどものための哲学対話」をしたいのか

上記2つの哲学対話実践を通じ、4歳から6歳のこどもたちと、哲学対話をしたいのは、実は保護者の皆さんなのではないかという思いが残りました。

わが子の発言に耳を傾けたい親の気持ちは、イベント終了時のアンケートでも毎回のように書かれていました。わが子が、他のこどもたちとどんな対話をしているんだろう、わが子がどんな発言をするんだろう、といった興味もさることながら、やはり自分でその言葉をききたいという、親子での対話欲求を強く感じる結果となりました。

私自身、哲学対話に興味をもった2013年、きっかけは自分のこどもと哲学対話をしてみたいというものでした。それを他のこどもと一緒にできたら、意見の多様性が生まれ、よりわが子にとっても、私自身にとっても、実りある時間になるのではないかと思ったことが出発点でした。

現在は、そのような自分自身の感じていた「こどものための哲学は、こどものためではなく、親のためでもある」という気づきをもとに、哲学対話の中で、子どもにとって何かよい効果が生まれているのだろうかということを、2015年7月の対話内容を分析しながら、探求してみようとしているところです。

哲学対話はこどもの何かに役に立つのか

「ちいさなこどもたちが哲学対話をして、どういう効果があるのか」という質問は、私自身これまでに幾度となくきかれている質問です。その都度、いくつかのメリットは言葉で提示していますが、科学的根拠に裏付けられるようなものはまだありません。私自身、ひとりの父親として、こどもの時間を何かわかりやすく役立てたいという気持ちを持ち合わせているので、先のような質問をする方の気持ちは非常に理解できます。

一方で、質問をする方々が一応に「こういう時間がこどもの頃にあったらなあ」とおっしゃるのも面白いことだと思っています。何かの点数が伸びるとか、働く上で将来きっと役に立つスキルがあるとか、そんなことは哲学対話の効果と

して立証されているものではありませんが、なんとなく、保護者の方が必要だと感じてくださっているのも事実です。

今は、そのなんとなく、に支えられて、私自身たのしく哲学対話をちいさな子どもたちとともに実践する機会を得られています。なんだかわからないけど、とにかくこれはいいと思えることが、答えがひとつとは限らない問いについて思いをめぐらせ、意見し、耳を傾ける哲学対話らしいような気がして、いつまでも解明されてほしくないと思うのもまた事実です。

自分であることに臆することなく

井尻 貴子

〈哲学対話〉に初めて触れたのは、もう10年も前になるだろうか。といっても、参加したわけでも、もちろん進行したわけでもない。哲学カフェの開催報告記事を読み、そんな場があるのか、と興味をひかれたのだった。それが実際にどんな場なのか。体感したいという思いが叶ったのは、しばらくしてからだった。たしか、大阪だったと思う。あるいは、神戸かもしれない。開催場所も曖昧なほど、そのときの様子は記憶に残っていない。しかしそれから数年、私はなぜかそうした場に関わり続け、いまでは月に数回は学校や街中で、授業や哲学カフェといった様々な形態で、こどもやおとなと哲学対話を行う機会を得ている。どうして?と聞かれてもうまく答えることができなかった、そのこと——私がそうした場に関わり続けている理由を、ここでは、P4E研究会のプログラムとして行った企画を振り返りながら、改めて考えてみたい。

「女性のためのてつがくカフェ」、4歳から6歳の「こどものための哲学対話」

2013年11月、駒場祭における「こまば哲学カフェ」の1プログラムとして、当時、カフェフィロが主催していた「女性のためのてつがくカフェ」の出張版を行った。内容は下記のとおりだ。

「結婚、どうする? ～女性のためのてつがくカフェ～」

《カフェフィロ in こまば》(企画: 廣井泉、井尻貴子)

セッション1 16:00-16:30 「結婚するならどんな人?」

セッション2 16:40-17:10 「仕事と結婚、両方したい?」

セッション3 17:20-17:50 「結婚したほうがいい?」

【対象: 高校生以上の女性(戸籍上の性別は問いません)】

文化祭の1プログラムとして気軽に参加できるように、30分1セッション、入退場自由とした。1セッションだけ参加された方もいれば、通して参加された方もいた。学生も、学外から参加の方もおり、年齢も、「結婚」経験もまちまちの人々が「結婚」について様々な角度から考えた。

終了後、ひとりの参加者が感想をもらった。「結婚してから、友達と結婚について話しにくくなった。結婚について考えることを話そうとしても、「既婚者は語る」みたいになっちゃったり、「結婚しているからいいよね」みたいになっちゃったり。だから、久しぶりにこうしたことについて話せて楽しかった」と。そ

れがいまも印象に残っている。

2015年3月～8月には、半年間にわたり月1回、NPO法人こども哲学おとな哲学アーダコーダのメンバーとして、4歳から6歳のこどもとその保護者のための対話の場、哲学対話「P4E ワークショップ こどものための哲学対話 — Philosophy for Children—」を定期開催してきた。

幼児とともに行う哲学対話は、フランスの映画「小さな哲学者たち」が公開されて以降、関心が高まっている。しかし、保育園では行われていても、一般に参加者を募集するかたちではあまり行われてこなかった。幼児と一緒にだと、多くの哲学カフェのように、街中の喫茶店を会場にすることは難しい、そうしたことが要因かもしれない。結果、以前から哲学対話に関心はあったけど参加するのは初めてという方がほとんどとなり、継続して参加される方も多かった。

ワークショップでは、こども、おとな、それぞれグループに分かれ、哲学対話を行った。回によっては、最後に全員での対話の時間を持つこともあった。最初はこちらが用意した紙芝居や絵本、動画といった素材からはじめ、次第にこどもたちが選んだテーマや、立てた問いからはじめるようにした。

また、最終回は、写真を使ったワークショップとして行なった。〈みえないけど、たしかにあるもの〉、〈きたないように見えるけどきれいなもの〉といったテーマのもと、写真を撮影し、発表するというものだ。家族ごとにグループとなり、クジで引いたテーマを片手に撮影にでかけ、最後に皆で発表しようというこの企画を実施した理由のひとつに、参加者から親子で哲学対話をしたいが、機会をうまくつくれないうと聞いていたことがある。そこで、テーマのもと一緒に撮影することをとおし、親子で、問い、考え、話す時間がうまれることを意図した。参加家族からは、テーマに対する反応や世界を捉える視点から、こどもも考えているということにはっとさせられたといった感想をいただき、好評を博した。

こうした一連のワークショップを実施してきたなかで、特に印象に残った感想がある。それは「テーマが難しかったようでしたが、答えがないとわかると安心したのか楽しそうに探していました」という、ある母親からのものだった。

発言のしにくさ

「結婚してから、友達と結婚について話しにくくなった」と言う彼女は、自分の発言を特別扱いされてしまうことを気にしていた。「答えがないとわかると安心したのか楽しそうに探していました」と述べた母親は、こどもが普段間違えることを気にして発言しにくくなっていることに改めて気づいたとも話していた。

こうした発言のしにくさは、日常のさまざまな場面で現れる。属性の違いや知

識の差。わかっていないことへの叱責。そこから生じる自分の発言が受け入れられるかという不安。しかし黙ってはいけけないのではないかという重圧。それらが生み出す緊張……こうしたものが、発言、言葉、思考が表現されることを静かに奪っていく。そうした時間が積み重なっていくと、私は、私であるということが少しずつ難しくなっていくような気がする。

その人が立ち現れる瞬間

こうした発言のしにくさが、哲学対話の場にはないとは言わない。けれど、自己紹介（自分がどこに属しているかを明示すること）の必要がなく、知識があることが参加条件とされず、進行役が問いの正解を知っているわけでもない、発言しても、しなくてもいい哲学カフェなどの場では、いくぶん緩和されるような気がする。そして、その緩みがあるからこそ、ふっと漏らすことができる言葉もあるのではないかと思う。

哲学対話では、その人自身、いまだ言語化していなかったことが言葉となりその場に差し出される瞬間が起こることがある。それまで、誰にも届いていなかった思考が、その場で起こっている対話のなかで、言葉を伴い、表現される。

その瞬間に、私は心ゆさぶられる。その人が、自分の言葉をつかまえにいく瞬間。その人がいま、そこでなにかを表現しようとする瞬間に。

それは、その表現のクオリティや思考の明晰さ、なにかがうまくできていることにひかれているのではない。ただ、そこでその人が表現されているということ、その人がただ「そうあること」が立ち現れる瞬間に、心ゆさぶられているのだと思う。

その意味で、私が哲学対話の場で大切にしたいのは、そこがその人が表現される場となっているということだ。私がここでいう「そこでその人が表現される場」は、その人が、なるべく、のびのびと、自分であるということに臆することなく、存在できている場だ。その人自身が「そうある」ようにいられる場。それは哲学対話により可能になり、またそれが哲学対話を可能にするように思う。なぜなら、人は真摯に考え、表現しようとするとき、どうしたって、「こうある」私に立ち戻ることになるように思うからだ。そして、真摯に考え、表現することだけが、哲学対話の場では求められるからだ。「こうあるべき」私ではなく、「こうある」私として、ともに考え、表現することが。

多様なままに

ある哲学カフェで、問いが出され、みんなが考え込んだとき、ひとりの参加者が進行役をしていた私に向かって言った「先生、どうなんですかね。教えてください」

さい」。

とっさに、答えていた。「私がお教えできることは、ひとつもないんですよ。私がここにいるのは、教えるためではない、一緒に考えるためだ、と。とはいえ、考えることが得意というわけではない。ただ、一緒に考える、ということに関心がある。それをしたい、と強く思っているだけなのだ。

一緒に考えることは、一人では決してできない。それは、誰かが、その人はその人であることを続けながら、同時に、私とここにいるからこそ可能になる。多様なひとが多様なままに、ともにいるということ。そうすることでその場ははじめて場としてなりたつ。

すべての人は、その人として、存在している。そして、ただそれだけのことがほかの人を揺り動かしてもする。それはあまりにも美しい話かもしれないが、私はそのことを信じ続けたいし、信じるに足る場をつくり続けたい。

つまり、私は多様な人が、多様なままに、その人として煌めく瞬間、煌めきあう瞬間に出会いたいのだ。のびのびと、自分であるということに臆することなく、存在する姿に触れたい。それは、容易なことではない。その難しさを十二分に知りながら、でも、いまともに思考し対話する時間のなかに、そんな瞬間は案外簡単に訪れることも知っているから。またそんな瞬間に出会いたくて、繰り返して、こうした場に関わり続けているのだと思う。

注：

カフェフィロ：市民が、みずからの哲学的対話・議論を営むことをサポートする任意団体。

2005年発足。http://www.cafephilo.jp/

NPO法人子ども哲学おとな哲学アーダコーダ：哲学対話をとおり「深く楽しく役に立つ、思考の時間を提供するNPO。2014年設立。http://ardacoda.com

「女性のため」から「4E」へ

廣井 泉

はじめに

UTCPの皆さんには2013年秋のP4Eワークショップ「『お金』をめぐる哲学対話」やこまば哲学カフェでの開催にあたり大変お世話になりました。哲学対話に関わるようになって7年、これまでのことを振り返ってみたいと思います。

始まりは「もう遅い」

現在、カフェフィロという哲学対話イベントを実施する団体で企画や運営を行うかたわら、事務局業務にも携わっています。主婦歴20年50代の私が、なぜこのようなことをしているのか、不思議に思われる方もいらっしゃるようです。思うところがあって40歳で大学に入り直し、哲学を専攻しました。大学院に進学して、どうにか修士論文を書き上げたときに「この齢になってようやく自分のアタマで考えたって実感してます！」と恩師に告げました。そこで返ってきた言葉は「もう遅いよ」の一言。たしかに、人生の折り返し地点を過ぎた人間にとって、多くのことはすでに遅すぎるのかもしれませんが、ですが、「遅かったからこそやれることがきっとある！」と、何ができるかまったく分からない状況で、なぜかやる気だけはありました。

哲学がくれた「力」

母の機嫌を損ねないようにすることが全てであった私にとって、長いあいだ自分のアタマで考える必要はありませんでした。思春期になり何度か反発も試みましたが、当時は無力で母を説得するだけの言葉も、行動するための勇気も、持ち合わせていませんでした。それから30年。哲学と出会い、自分のアタマで考えるという「力」を手に入れたことによって、ようやく母から自由になれたのです。世界は多様であることを知らない人、また気づいてはいても受け入れられない母のような人は、どこにでもいます。自分や他人の考えを吟味する術を知らないかつての私のような人も大勢います。けれど、それは本人のせいだけではないのかもしれませんが。対話し、自分のアタマで考える機会に恵まれなかったからではないでしょうか。これらの体験と思いが、現在の活動の原点にあります。

「哲学対話」との出会い

哲学と社会との接点を探していて出会ったのが哲学カフェでした。難解な哲学用語や哲学者の説に頼ることなく、一つの問いを対話によって深めていく「哲学対話」の存在を知ったのはこのときです。自分に力を授けてくれた哲学と、哲学カフェでの哲学対話とが同じ「哲学」なのか、当時はよく分からなかったのですが、考えることの面白さを多くの人と共有したいと思っていた私は、哲学対話に哲学と社会を結ぶヒントがあると感じました。考えるきっかけとしての「対話」がとても新鮮に思えたからです。ほどなく、哲学研究者で哲学対話の実践者でもあった方たちと「哲学対話プロジェクト」と称するグループを立ち上げ、ファシリテーションのための勉強会を開いたり、対話イベントを開催したりと活動を始めました。思い出深いのは2011年に『小さな哲学者たち』というフランス映画が公開される際に、配給会社の方に向けあって、P4C (Philosophy for Children) 研究者のトークイベント付きの試写会を東京日仏学院で開催したことです。反響は非常に大きく、この映画を通じて多くの方々が哲学対話と子どもの哲学に関心を持たれたのではないのでしょうか。

P4E ワークショップで「お金」の哲学対話

巷に哲学対話に関心を持つ人が増える一方で、自分の家族や友人に哲学の面白さを理解してもらえないことが気に掛かっていました。「時間のムダ」「非生産的」「ひま人の道楽」などの言葉に反論できずに苛立ち、どうにかして哲学を社会に役立てたいと常に考えていました。

一般に哲学が不人気の理由の一つに「お金」のことがあるのではないのでしょうか。哲学が「稼げない＝役に立たない」と思われるのは残念ですが、一方、哲学カフェで「お金」が話題にのぼると「お金は汚い」「お金は諸悪の根源」など、悪者扱いされることも以前から気になっていました。いつか大勢の人たちとお金について考えてみたいと思っていたところ、梶谷さんとの出会いがあり、実現したのが2013年11月に開催したP4Eワークショップ：「お金をめぐる哲学対話」です。ゲストにお招きしたのは、かねてからお金がテーマの際にはぜひ呼びたいと思っていた影山知明さん。社会や地域に活かすお金の仕組み作りで活躍されながら、ご自身で経営する喫茶店で哲学カフェも開催されています。当日は、哲学対話に関心のある方はもちろん、日ごろは哲学とは無縁の金融関係の方など50名近い参加者の方々にお越しいただき、盛況に終わりました。

女性のための哲学カフェ

未来を担う子どもたちを育てるのは、親や教育者だけではなく、世のすべての大人たちの役目ですが、やはり最も身近な存在である母親の影響は計りしれません。自らの体験から「お母さん」を含む多くの女性に哲学対話の面白さを知ってもらいたいと、友人の協力を得て2013年夏に念願の「女性のためにつがくカフェ」を始めました。当時、すでに東京ではかなりの数の哲学カフェが開かれていましたが、どこも土曜日、日曜日から平日の夜の開催でした。ところが、専業主婦や母親は、週末や夜の時間帯は家族がいるので家を空けにくく、なかなか参加できません。ならばと、平日の午前中に開催することにしました。女性限定にしたもう一つの理由として、上から目線で偉そうだったり、一方的に決めつけるような男性の言動から女性を守りたかったことがあります。女性が不快な思いをすることなく、安心して話せる場にしたかったのです。

「子どものしあわせ」「世間体」「家」など当初は主婦にとって気になるテーマを意識して取り上げていましたが、盛り上がったのは「ともだち」や「カワイイ」など身近で一般的なテーマでした。30代、40代の方を中心に、20代～60代の幅広い年代の方々と共に、時には4～5名で和気あいあいと、時には15名以上で賑やかに対話を重ねてきました。他人の発言をよく聞き、初対面でも「そうそう」「そうなのよね」と共感し合えるのは女性ならではの特技です。そうした心許せる雰囲気になんか安心されるのか、時には涙を流しながら話す方もいらっしゃいました。

2013年秋のこまば哲学カフェでは「結婚、どうする？」をテーマに女性だけの哲学カフェを実施しました。大学の学園祭ということもあり20歳前後の女性の参加を想定していましたが、UTCPスタッフの皆さんの熱心な勧誘のおかげもあり10代～50代と幅広い年代の女性にご参加いただきました。高校生から主婦まで、多様な職業、幅広い年代の参加者の方々と結婚について対話できたことは、未婚者にとってはライフデザインを描く上で、また既婚者にとっては結婚を再考するうえで、大変良い機会となりました。

「4E」へ向かって

嬉しいことに、女性のためにつがくカフェの参加者が、ご家庭でお子さんと哲学対話されたり、地域で哲学カフェを始められたりと、哲学対話が身近になりつつあります。参加者自らが実践者になることによって、今後ますます哲学対話は広がっていくことでしょう。

2015年5月から、女性のためにつがくカフェは、どなたでもご参加いただ

けるよう平日夜に開催しています。「女性のため」とはいうものの、実質は「4E (for Everyone)」です。ある時、対話イベントにトランスジェンダーの方が参加され「女性」とは何かを考えさせられる機会が重なりました。女性に限らず誰にとっても安全な対話の場にしたいとの思いが強くなったのはその頃です。「男性 or 女性」という括りに違和感を覚えるトランスジェンダーの方々の存在が、「女性」にこだわっていた私の目を多様な性へと向かわせてくれたのでした。

自分と考えを異にする人たちとの対話には、自らのアタマで考えることが強く求められます。他人を理解しようとする試みを通して自らを知り、自らを更新していくことは、哲学対話の醍醐味のひとつではないでしょうか。そうした対話を可能にするためにも、誰もが安心して発言できる場であることを大切にしていきたいと思っています。3年目を迎えた「女性のためのてつがくカフェ」は女性だけで楽しむことを卒業して、誰もが安心して参加できる「4E」の哲学カフェへと変わりつつあります。

さいごに

P4E プロジェクトで対話イベントやこまば哲学カフェを開かせていただいたことは、哲学対話活動を続けていくことへの大きな自信へとつながりました。それまでは、自分では信じているものの、とかく世間では人気のない「哲学」に関わっていることに常に不安が付きまわっていましたが、UTCPでのイベントを通じて同じ志を持った方々と出会えたことは、大変励みとなりました。さいごになりましたが、イベントの実現に向けて、時間を惜しまず肉体労働も厭わないUTCPのスタッフの皆さんと、稚拙な企画にも関わらず背中を押して励ましてくださった梶谷さんには心より御礼申し上げます。有難うございました。